

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321

編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

114号

「むかいじま ブラボー！」

平田 義

向島地域では、コロナ禍であっても、企画団体の創意工夫の下で様々なユニークな活動が展開されてきています。その活動の拠点として、地域の活性化と住民交流に寄与してきました、旧向島中学校跡地の「むかちゆうセンター」が閉鎖されることになりました。今号では、「むかちゆうセンター」の活動を支える事務局としての働きを中心的に担ってこられた、NPO法人向島まちづくり協議会の山崎洋一さんに、向島における地域活動のこれまでと今後についてご寄稿いただきました。活動の一部のご紹介を含めてご一読ください。

「むかちゆうセンター」から向島地域活動へ — 共助社会の形成 —

NPO 法人向島駅前まちづくり協議会 山崎 洋一

先月終わり、ひと気の無い元向島中学校跡地を歩きました。ついこの間まで、多くの人が行き交っていた記憶がよみがえってきました。

2019年7月から約3年間、30余の団体が元向島中学校跡地（「むかちゆうセンター」）を地域活動の場として利用してきました。短期間ではありましたが、この跡地利用団体や施設建て替えのため同校内の建物で業務していた愛隣館との情報交換・相互交流、また地域住民と交流は、地域の活性化に大いに貢献したものと確信します。また、地域住民にとっても、利用団体の催すイベントなどに参加することで生活に大いに充実感を持つことができたのではなかったかと思えます。

しかし、京都市の学校跡地活用方針によって、むかちゆうセンターは、本年9月末をもって利用を閉じることになりました。一部の利用団体は、市の用意した向島ニュータウンの5街区集会所や空き家住

戸、愛隣館の地域交流ルームで活動を続けることができていますが、大多数の利用団体は、他に活動場所を変えたり、活動場所を失うことになりました。このように地域活動を推進し地域の活性化を図ることを方針とする市が、ようやく得られた地域活動の場を取り上げるといふ、市政の一貫性の無さ、施策の矛盾に憤りを感じざるを得ません。

そこで、むかちゆうセンターの地域活動をサポートしてきた「むかちゆうセンター運営委員会」は、本年9月末の任務終了を前に、1) 閉鎖によって活動場所を失った利用団体の活動場所の確保、2) 市の方針であしなが育英会施設予定地になった元二の丸小学校跡地（廃校当初、地域住民が地域活動の場所として予定していた。）の地域活動への開放、3) 今後、実施される学校跡地の活用が地域住民に有為なものになることと、その決定過程の情報公開を京都市市長に要望し、それを見守るため「向島地域活動推進連絡会議（仮称）」を発足させました。



▲むかちゅうでの団地カフェ 2021

し、向島地域の活性化を図ることで

この新しい会議の大きな目的は、前述の要望の経過を見守る役割とともに向島地域全体が全員参加で向島地域活動を推進

いが少なく、地域の課題解決に至らず、地域住民が期待したほどの成果は得られなかったことです。いずれも地域全体で話し合い、課題解決や活動の方法などを見出す、良い機会だったと思いますが、残念ながらその機会を生かすことができませんでした。

こうした経験から、この会議の大きな目的は、向島地域全体で話し合いをする場所や機会をできるだけ多く作り、多くの住民の参加で課題解決を図り、インクルーシブな社会づくりに貢献することだと考えています。

もう一つは、市の財政悪化によって公助が細り、他方、地域の自治組織は担い手の住民の高齢化でその役割を十分果たせなくなり、特に高齢者への配慮が必要になっている現状から、ソーシャルビジネスを含む非営利法人等の地域活動への参加を促すことです。これら法人等の活動をサポートすることがこの会議の大きな役割だと思います。

今後、益々、住民の高齢化が進行し、公助に多くを期待できない状況の中、地域活動の充実による共助社会の実現が差し迫った時代になってきています。

近いところでは、向島地域全体で話し合うことで良い問題解決でき、今後の地域の発展につながったのではないと思われる2つの事例がありました。一つは、京都ダルクが向島南学区の街中にグループホームを建設しようとして、地元の強硬な反対運動にあり計画を断念する結果になりましたが、この施設もどこかに建設することが必要であり、向島地域全体でこの問題を話し合うことが必要だったのではないかと思います。もう一つは、京都市主導で2016年に始まり、2021年まで推進活動をつづけた「向島まちづくりビジョン」は、地域住民が参加しないキャッチコピーづくりが先行し、地域全体の話し合

◆◆ 2022年 8.9.10.11月の活動 ◆◆

- 7/28・8/4 『遊隣』海企画
- 8/18.25 『遊隣』クッキング企画
- 8/6 アオギリ平和集会・こどもおとな食堂「ひまわり」
- 8/11 なつやすみ平和映画上映会
- 9/3 こどもおとな食堂「ひまわり」
- 9/12.13.14.16.17 デイサービス BBQ
- 9/24 みんな食堂
- 9/25 向島元気バザール参加
- 10/1 こどもおとな食堂「ひまわり」
- 10/20~21 デイサービス淡路島一泊旅行①
数十年ぶりの温泉！にほっこり
- 10/23 向島まつり
- 10/26~27 デイサービス淡路島一泊旅行②
- 11/5 こどもおとな食堂「ひまわり」
- 11/6 藤ノ木学区避難訓練参加
- 11/13 ニノ丸学区避難訓練
- 11/27 兵馬俑*お引越し
(むかちゅうー秀蓮小中学校へ)

観覧車に
乗りました！



※兵馬俑(へいばよう)：秦の始皇帝のお墓に実物大の兵士や馬等の人形が埋められていました。これは、死後も始皇帝を守るために作られたと言われてます。その実物大レプリカが中国の西安市の中学校より旧向島中学校に1984年、日中友好交流の記念に寄贈されました。西安市との友好のシンボルでもある貴重な「兵馬俑」を向島秀蓮小中学校に地域の方々と一緒に移設いたしました。

柏木正行さんの魂に触れる
味
人間には
それぞれの味がある
甘い味がある
少し
塩辛い味がある
好きなき味もあれば
嫌いな味もある
わたしは
人間の味を大事にしたい

「人を味に例えておられるのだと思います。柏木さんは、様々な人との出会いを大切にされていたのだからなま〜と感じました。(矢口恵美)



それぞれの思いつながる 向島まつり 2022

10月23日(日)、晴天の中、『向島まつり』が3年ぶりに向島ニュータウンセンター広場で開催された。ステージでは、地域の小中学校・高校の吹奏楽の合同演奏や住民団体等による多彩な発表、出店では地元野菜・すばる高校・住民団体・福祉事業所、そしてペルー等の国際色豊かなお店による飲食物や展示等が立ち並んだ。来場者は過去最高の約2,000人で、子どもから高齢者、障がいのある方、乳幼児連れの若い世代、多様な国籍や文化をもつ方など、向島が取り組んでいる健康福祉、多文化・多世代共生が象徴され、おいに賑わった。



▲向島ニュータウンセンター広場にて

振り返ると、第1回は2008年に遡り、今回で16回目となる。向島ニュータウン入居開始が1977年のため歴史は浅いが、それまで街区や学区を越えてのつながりがあまりなく、また2005年頃から向島はすでに少子高齢化時代に突入していた。そのような状況の中、向島駅前の商店等が撤退し駅前の空き地が不安定になったため住民運動が起こり、『向島駅前まちづくり協議会』が発足した。その協議会がニュータウンの地域住民・団体等に呼びかけて実行委員会が形成され、「住民の交流」「地域活性化」を目的に『第1回向島春の祭典』が2008年3月に開催された。場所は、向島中央公園西広場で(現在の元気バザール会場)、出店数も少なく、こぢんまりとしたスタートだった。

その後、年1回開催し、地域のネットワークが徐々に作られていく中、来場者や出店数も増えていった。2010年から秋開催の『秋の祭典』に、場所も向島ニュータウンセンター広場に移行し、「多文化共生」も目的に加わり、多様な国々の出店等も増え、大規模なまつりへと定着していった。

2017年、向島5学区から実行委員会を組織し、まちづくりに参画する住民を広く掘り起こし、学区を越えて連携したまちづくりの機運を高めることを目的に、『向島5学区全体の『向島まつり』』に発展した。2020年から2年間はコロナ禍により規模縮小を余儀なくされたが、「あつまれなくてもつながっている」をテーマにラジオやスタンプラリー等内容に工夫を凝らし、むかちゅうセンターで継続した。

16回目の今回、新たな取り組みも始まった。地域通貨「むっか」は、地域の事業者から受注したポスティングを若者が実施して「むっか(1むっか50円)」を受け取り、当日の協力ブースで利用された。また、子どもが作って大人が読む新聞「子ども新聞」は、子どもたちが出店者や来場者等に取材して記事にしており、子ども心に戻れて楽しく心とんだ。いずれも子ども・若者と地域をつなぐ良い機会となった。

このように『向島まつり』は、手作りの温かさがあり、来場者や出店者同士にも垣根なく「つながり」を作る地域ならではの良さがあると思う。また、向島ビジョンやむかちゅうセンターでの活動等、徐々に地域の活動の輪が広がり、向島5学区のまつりにつながったことも大きい。ただ、役員も高齢化してきており、次の世代につなぐことも大きな課題となっている。

愛隣館も第2回から参画し、焼きそばやちぢみ、震災支援の出店、園の先生のステージ、会場設営のマンパワーでのお手伝い等も継続させて頂いている。インクルーシブな社会の実現に向けて、継続して地域に寄り添いながら共に歩んでいきたい。



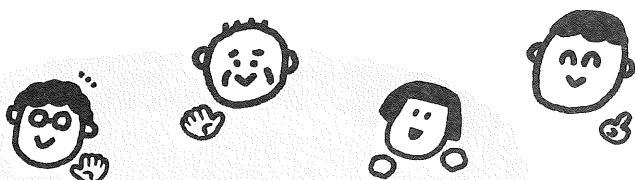
▲子ども新聞

最後に、先述した「子ども新聞」から引用させて頂く。お題：向島の好きなおところは？『みんなが仲よしなおところ』

みんなの笑顔が絶えないまつりだった。

(支援センター「あいりん」佐藤雅裕)

団地カフェ



団地カフェは普段なかなか人と繋がりがもてていない認知症や外国籍の方や障がい者、ひきこもり等の人がつながりを作れる場をつくっていったらという目的でおこなわれています。

始まりは「向島まちづくりビジョン」で地域の課題を出して解決しようという取り組みの中で、暮らし安心WG（ワーキンググループ）ができました。そのワーキンググループでは暮らしの課題を解決していこうということを目的に動いていました。そこでなかなかイベントに出ていきにくい認知症の人にも声をかけてもらってきこう「認知症カフェをしよう」という案が出たのが団地カフェの始まりです。ですが、認知症に限らず外国籍の方や障がい者、ひきこもりの方などなかなか繋がりをもてていないのでは？ということとで様々な人が集える場として『団地カフェ』が生まれました。「私が行けるリスト（※高齢分野、障がい分野の活動が中心です）」という向島で行われているイベントのチラシをお渡しして、他にも集える場を紹介してきています。一度だけの参加で終わらず、そこからいろいろな場に参加し繋がりが広がっていかれたらと思っています。いろいろな人がいて、だれでも集えるという場所は愛隣館の大切にしている『インクルーシブな社会の実現』につながっていると思います。



11月の団地カフェではみんなで体操をおこない、食事（栗ご飯、豚汁、コーヒー）を食べてから音楽鑑賞（三線演奏、ウクレレ演奏）、野菜販売がありました。中でもみんなが楽しみにしているイベントが焼き芋大会です。初回からこの焼き芋が人気で楽しみにされている方も多くおられるとのことでした。

ぜひ団地カフェで身体を動かして、お昼のひととき、みんなでゆっくり過ごしてみたいかでしょうか。「最近、外に出ていない...」というあなたのご参加をおまちしています。（堀田明穂）



クリスマス献金のお祝い ～インクルーシブ社会の実現を！～

みなさまのお支えにより、ここまで活動を続けてくることができました。感謝です。

コロナ禍で、皆さまにおかれましても、大変な状況だと存じ上げますが、「インクルーシブな社会の実現」を目指す愛隣館の活動をお支えいただけませんか。どうぞよろしくお願いいたします。

<目標金額> 300万円

<寄付金振込先> 寄付控除が受けられます

郵便振替：01020-5-39321

口座名義：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

編集後記

- ▼114号のご意見ご感想お聴かせ下さい。(さ)
- ▼今年の世相を表す漢字が「戦」となった。ロシアのウクライナ侵攻、北朝鮮のミサイル発射などにより「戦」争を意識した年だからだそう。その発表から4日後に、日本政府は、新しい安全保障関連3文書を閣議決定した。その文書には「反撃能力」（敵基地攻撃能力）の保有が明記されている。これは、専守防衛を国是としてきた防衛政策の大転換であり、完全に憲法の理念から大きく逸脱している。今年を「戦」争できる国に突き進んでいくことを決定した「年」にしたのだ。これは断固として許されるものではない。今からでも遅くない。この政策を撤回させ、来年の世相を表す漢字を「平」「和」となるように力を結集させましょう。(ひ)